

命いっぱい生きた日々

●元・NHK松山放送局チーフ・ディレクター●

鴻農周策



NHK出版

元・NHK松山放送局チーフ・ディレクター

鴻農周策

命いっぱい生きた日々



NHK出版

鴻農氏の病状の推移などについては、愛媛県立中央病院の、主治医、原雅道内科部長、光藤英彦内科部長、元・道後温泉病院（現在、ベテル病院内科部長）の今井敦子先生からデータとお話をして頂き、更に、ベテル病院に入院中の川口武久さん、NHK松山放送局で鴻農氏と一緒に仕事をした方々からは、貴重なお話や内容チェックをして頂きました。装丁、表紙、紙面構成などでは、グラフィック・デザイナーの池貴巳子さんに、素晴らしい仕事をして頂きました。

鴻農氏の治療に当たられた主治医の原先生は、「どの段階でもどう対応すべきかを十分に考えて闘病生活を送っていた鴻農氏の場合は、直接、本人に『告知』してもいいのではないかと、幾度も考えさせられた」と話しておられます。

鴻農氏の日記は、彼が「ガン」と知ってからでも強く生き、残された日々を精一杯、生きようと努めたことを物語っています。この日記が、皆様の共感を得、またガン治療のために何らかの役に立つならば、故人にとって最良の供養となるでしょう。

文末になりましたが、この「闘病記」をまとめるにあたって、ご協力頂いた多くの方々に、改めてお礼を申しあげます。

平成六年四月一日

文責 NHK出版 語学部 山内 正剛

命い。ばい。生きた日々

鴻農周策

序文 鴻農周策君のこと

この遺稿の著者、鴻農周策君は、一九八四年、多発性骨髄腫というガンに冒され、八年にわたる闘病の甲斐もなく、一九九二年一月一日に亡くなりました。この病気は骨髄がガンに冒され、ちょっとしたことで骨が折れ、骨折がおこるとガン細胞がどつと血液中に流れこみ、全身がたちまちの内に冒されてしまう恐ろしい病気です。鴻農君は、骨が砕け、激痛に苛まれる中で、この日記を書き残しました。絶え間なく襲う激痛、闘病生活に巻きこまれた家族への思いやり、回復への努力、残された時間と仕事への情熱など、死の宣告を受けた人間の苦悩がなまなく綴られています。父として、夫として、職業人として病いに打ち勝つために、彼は必死の努力をします。

鴻農周策君は、一九四〇年（昭和十五年）二月一日、旧満州の本溪湖に生まれ、終戦の翌年、お父さんの故郷である四国、松山に引き揚げてきました。お父さんは印刷所を経営しておられ、彼のメモ好きやイラスト好きな点はその影響があるように思います。小、中、高校時代は松山で過ごし、一九五九年、東京外国語大学・英米科に入学。一九六三年に、NHKに入社しました。初任地は福岡放送局で職種は放送記者でした。私が、彼に会ったのは一九六八年（昭和四三年）で、彼が福岡放送局から東京の外信部番組班に転

勤してきた時です。丁度、私も四年間のパリ特派員の勤務を終えて、外信部の副部長として帰国した時でした。

当時、彼の担務は「海外ニュース」で、海外の映像通信社が取材したニュースを受け入れ、日本語のコメントをつけて放送する仕事でした。外国語大学を卒業し、福岡放送局で四年間、ニュース記事を書く訓練を受けてきた彼にとっては、うってつけの仕事だったと思います。彼は、活動的で、よく働き、番組プロデューサーとしての才能にも恵まれていましたので、一年後には海外情報を集めた「海外リポート」、後の「海外ウィークリー」班に移り、鋭敏な時代感覚でフレッシュな企画を立ててくれました。

その後、私は、「あの時、世界は」という番組の制作にかかりましたので、鴻農君と、直接、同じ部屋で仕事をする機会はなくなりましたが、彼が、一九七〇年に、フィリピンに残留孤児とその父親である元日本人兵士との再会を追ったドキュメンタリー「パナイ島の再会」を制作して芸術祭に参加したことや、一九八四年には、胡耀邦時代の中国を取材し、「中国'84春節大移動」と「人民服を脱ぐ上海」のドキュメンタリーを制作したところと、瀬戸内海の春を詩情豊かに描いたNHKスペシャル「春・瀬戸内海」などの作品はよく知っています。当時、私はNHKスペシャル番組部長で、各部からの提案を採択し、完成作品を見る立場にありました。「春・瀬戸内海」を発想したのは、彼のお父さんから貰った小冊子にヒントを得たものであることを後に知りましたが、瀬戸内海に浮かぶ島々の暮

らしの、襪にまでふれた取材は、よそ者には想像もできない島の人々の息使いが伝わってくる、ほのぼのとした名作でした。四国を愛し、父母を敬い、近隣の人々と親しくつき合ってきた鴻農君ならではの番組だと感心したものです。

また、中国取材については、私も経験がありますが、取材制限が多かった当時、「自由化政策をとりはじめた中国」の実情を生き活きと描いた努力は、大したものだという印象を受けました。中国は、彼にとつては生まれ故郷であり、幼年期を過ごした懐かしい国だっただけに、文化大革命の軛から開放されはじめた中国をあたたかく優しく見つめていたようでした。

また、彼は病いに臥すようになってからは、特に医療問題や老人問題、難病患者など社会的な弱者に対する関心を強め、小康を得て仕事ができた時期に、自らも車椅子の生活をしていたためか、身障者にとつて通りにくい道路は何処なのか、どんな設備が必要なのかなどを調べて、「車いすの見た街」という番組を制作したり、愛媛県の新生児死亡率が全国一高いという報道があれば、直ちに、「赤ちゃんを救え」という番組を制作しています。

また、注射針などの医療廃棄物問題や、高知県などに多いATL（白血病の一種）問題などを「医療シリーズ」として組み、地域に密着した報道として高い評価を得ています。

そうした作品の中で、特に人々の記憶に残る仕事は、「命燃やす日々」を制作したことでしょう。これは、鴻農君の病気が重くなり、末期を迎えるころに企画制作されたもので

すが、自らの病いに重ねるように、運動神経が麻痺して、食事をとることも、呼吸をすることもできなくなる難病、筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者の川口武久さんの生活を追ったもので、歩くことも、字を書くことも、声を出すこともできない川口さんが、病院内で新聞を発行したり、難病患者への理解を広げる会を主宰する様子などを描いたものです。鴻農君は亡くなった日の前夜遅くまで、この番組の制作にたずさわり、まだ三〇分程、長い編集中のビデオを見終わった後、「明日からコメントを考えよう。今日は疲れたから寝るよ」といって眠りにつき、そのまま黄泉の国に旅立ってしまいました。

享年五一歳。四三歳の働きざかりに難病にとり憑かれ、溢れる意欲を存分に発揮できないまま亡くなったことは、死んでも死に切れない思いだったでしょう。日記には――

「それでも生きたい」と、その思いを書きこんでいます。

彼には、彼とともに病いと闘い、悩んだ奥様のむつまじさんと、美河さん、美帆さん、美南さんの、三人のお嬢さんがいます。彼は、この四人をこよなく愛し四人の協力に感謝し四人の存在を生き甲斐として病いと闘ってきました。

彼の生涯を思うとき、薄幸の中にも家族の結びつきの深さが、せめてその短い人生を充実したものにしていたように思えます。

一九九四年四月一日

元・NHK放送総局長 尾西 清重

目次

序文

第一章 病いと一緒に歩いていこう

発症一九八四年一月

苦闘 聖母病院

松山へ

ベッド空を飛ぶ ちよつとした空輸作戦

愛媛県立中央病院「整形外科室」

「病名 骨粗しょう症 加療三か月」

注射開始

病棟冬景色

一九八五年 新年・出発

ベッド上のリハビリ

タバコがやめられない

春を待つ

「拘束」と「疑心」の二重奏

失敗と痛恨

歩く執念

長い夏 一

衝撃

長い夏 二

第二章 負けてたまるか

自己嫌悪

多発性骨髄腫

「知ってしまった」

「吉報」

むつみは知らされていた

私は再び東京へ来ました

松山帰還

春・瀬戸内海

瀬戸大橋スペシャル

医療シリーズ

第三章 最後の闘い

激痛再び

再入院

一九九〇年 休職中

時間がもったいない

「命燃やす日々」最後の作品

最初の危機

酸素吸入はじまる

あとかき



鴻農周策氏（1986年11月）

第一章

病いと一緒に歩いていこう

闘病日誌と書くのはよそう。

闘病、克病を含む、今の、明日の、

人生の日々の日記を考えよう。

すべてを「病い」ひと色に

塗りつぶす日々なんて、

残酷ではないか。

病いと一緒に歩いていこう——発症から、退院まで——

一九八八年 一〇月起

鴻農周策

美河・美帆・美南に伝えたい、
父さんと母さんの、大事な日記です。

この日記は、僕が、この病気になって

東京目白の聖母病院に入院するところから始まります。

書き始めたのは、一九八八年（昭和六三年）

——長い入院を終わり、東京の仕事に戻り

それから、松山に二度目の転勤がかない、

不思議に体がよく動いて仕事を人並みにしていた時期です。

この時、自分の病名はすっかりわかつていた時期でもあります。

発症・一九八四年一月

一月という月は、自分の短い一生の中で忘れることのできないカレンダーのひとつだ。しかも、一月九日は。

昭和三九（一九六四）年——自分がNHK報道マンの新人として、福岡局に配属になり、なんとか自分で歩きはじめた二年生の年。

その前の年、昭和三八年の一月九日、福岡県大牟田市の三井三池炭鉱で炭鉱災害史上空前の炭塵爆発が起き、四五八人が死亡した。

この時、配属わずか三か月の自分は、炭鉱病院にはりついて、地底から運びだされるおびただしい遺体の数を数え、氏名を前線デスクに報告するという仕事を命じられた。

一年後、合同一周忌の法要の取材に、大牟田にでかけた。

取材をひととおり終えて、通信部にあがってきた所へ、福岡のニュースデスクから電話が入った。

「お母さんが危篤だ。すぐ松山に帰りなさい。」

体から血が引き、まわりの昼間の大牟田の光景が灰色に変わって見えた。